

## あこがれの時代

旭川市立光陽中学校 三年 坂田 玲

ときどき、

「いいなー。できたら一九五〇年代に生まれたかったなー。」

なんてことを言って笑われる。数ヶ月前のネタですら、時代遅れだと言われる昨今だ。七〇年も前に「生まれたかった」などと言えば、あきれられるのも当然だろう。しかしぼくは、いたって真面目である。

一九五〇年といえば、戦争に負けて、悔しくて悲しくて大変だったときだ。社会も人々の生活も変わり始めて、自由になって、夢と希望にあふれてきたときだと思う。だから、みんなに勢いがあったんじゃないかと思う。

そしてぼくは、活気のある人達にとってもあこがれている。プロレスラーだったら、伝説の力道山。彼は、戦後の日本に活力を与え、勇気をくれた人物の一人だ。テレビのある家にどかどかと集まって、みんなで応援したというエピソードをきくと、お祭りみたいだと思うし、楽しそうだと思う。

人々に活気を与えた熱い人たちと言えば、一九六〇〜九〇年代のロックバンドもそうだ。彼らの音楽をきいていると、体の中からエネルギーがあふれ出てくるのを感じる。まるで、彼らの心臓の鼓動が体の内側まで響いてくるようだ。だから何十年たった今でも若者の心をゆさぶるのだろう。

今日では、とても手に入りにくいビンテージジーンズも、ぼくを昭和に引きこんだアイテムのひとつだ。ジーンズ一本が当時の状況を教えてくれる。デザインには、当時の出来事、文化、社会が反映されているからだ。今でもたまに、閉鎖された鉱山からジーンズが発見されることがある。なぜ、このような所から発見されるのだろうか。一八七〇年代、アメリカではゴールドラッシュが起こり開拓が進んでいた。そこで働く鉱山労働者やカウボーイ、農業者向けに作られた丈夫な作業着、これがジーンズだ。今でこそ老若男女に愛されるオシャレ着だが、もとは作業着だった。

団体で鉱山から金を発掘していたらしいが、ジーンズのポケットに金をしまわれ、持ち帰られては全体の収入が減ってしまう。そこでリーダーは、目の前で着替えさせることにした。こうして労働者が勝手に金を持ち帰ることを防いだのだ。ここで

脱ぎ捨てられたジーンズに着目してほしい。鉾山の奥に置きっぱなし。もしその日以降、持ち主が仕事できなくなれば、永遠にほったらかしだ。時を経て、たまに見つかるジーンズ。もちろん泥だらけだ。しかし、一五〇年ぶりに太陽の光を浴びるのかと思うと、とても感動的だ。

こうして好きなものを書き連ねていくと、ぼくはドラマチックな物語のある人や物に強く惹かれるのだということが分かる。

五〇年代、六〇年代、七〇年代、八〇年代、九〇年代、そして二〇〇〇年の突入の瞬間を味わってみたかった。そしたら今、六十九歳とか七〇歳。おせっかいやきのおじいさんになって鬱陶しいと思われていたかもしれない。

「冬にはね、石炭当番がいたんだよ。」とか、「学校では鶏と兎を飼っていたんだよ。」とか、「山で駆け回って遊んだよ。」なんて大人たちから聞くと、羨ましくてしかたがない。ご近所の人たちと世間話をしながら背中を洗いあうのも楽しそうだ。温かくていい時代だったんだろうな。

どんなにあこがれても昭和に戻ることはできない。ジョージ・マイケルもフレディ・マーキュリーもジョン・レノンも亡くなってしまった。

三〇年続いた平成も、今年で幕を閉じる。これからの時代を、後世の人たちからあこがられる時代にしたい。まずは、二年後に開催される東京オリンピック・パラリンピックだ。これをガツンと盛り上げて、希望にあふれるエネルギーな時代の幕開けとしたい。

次の時代を切り拓き、物語をつくっていくのは……ぼくたちだ。